
過ぎ去った遠き日～電話の距離～

紅月 セイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ぎ去った遠き日々 電話の距離

【Nコード】

N1096L

【作者名】

紅月 セイル

【あらすじ】

電話の距離。

それは近いようでそれはとても長い距離。

それは触れそうで触れることの出来ない距離。

そんな距離でのちよっとしたお話です。

「誕生日おめでとつございます」

ただその一言を言ったけなのに……。

手が、

足が、

体が、

……震える。

「馬鹿か……。俺は……………」

いつも会っている。

いつも話をしている。

……ただ電話をかけるのが初めてなだけ。

「……何を緊張する必要があるんだ？」

携帯のアドレス帳から彼女の名前を探し選ぶ。

携帯番号の欄にカーソルを合わせる。

「……………」

ドクン、ドクン、ドクン、……………と鼓動が早くなる。

でも、もし彼氏^{あのひと}とでも電話していたら……………。

そう思いながらもゆっくりと震える親指を発信ボタンの上に動かす。

そして……………。

「トウルルルル、トウルルルル、トウルルルル、トウルルルル、トウルルルル、トウルルルル」

1コール・・・2コール・・・3コール・・・4コール・・・
・・・出ない。

そのうちに留守番電話サービスに繋がった。

「・・・発信音の後にご用件とお名前を・・・」

留守番電話サービスの機械的な声が響く。

「・・・」

留守番電話に入れるか・・・。

そう思い呼吸を整える。

そして・・・。

「誕生日おめでとございます」

そう言って電話を切った。

「思いつきり早口だった・・・」

やっぱり・・・緊張していたらしいな・・・。
でも・・・。

「先輩・・・電話に出なかったな・・・」

それが良かったのかどうかはわからない。

出ていたら逆にいえなかったかもしれない。
でも出なかったことを少し残念に思っている自分もいた。

「・・・・・・・・・・。まあ一応言えたしいいか・・・・・・・・・・。」

そんな事を言っていたとき、いきなり携帯の着信音が鳴り響いた。

「？電話だ。誰から？」

不思議に思いながら携帯を開くとディスプレイに出ていたのは、

ついさっき、電話をした・・・先輩の名前と番号だった。

鳴り響く着信音。

俺の鼓動は少し早く撃ち始める。

電話をかけたときと同じく震える指で受信ボタンを押した。

「・・・・・・・・もしもし・・・・・・・・」

「あ、こんばんわ・・・・・・・・」

少し高めの先輩の声が聞こえた。

「こ、こんばんわ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

・・・沈黙する。

動悸が激しい。

落ち着け。

落ち着け・・・俺。

先輩に電話をかけたときからこうなることはわかっていたはずだ。いつも通りでいいんだ。

・・・いつも通りで。

「び、びっくりしたよ？いきなり電話がかかってきたから・・・」

「す、すみません。今日先輩の誕生日だったのにずっとお祝いがいえなかったので・・・」

「あははは、そういうことだったのね」

「はい・・・」

「・・・ごめんね」

「え？」

「電話出れなくて。丁度、『誰かからおめでと〜電話でも着たりして・・・』なんてメールを読んでいたら本当にかかってきたからびっくりして・・・」

「びっくりして？」

「びっくりして・・・携帯を投げちゃった」

「ちよっ・・・」

「あ、あははははは。うめんね」

「……先輩面白すぎです」

「ふふっ。……でもちゃんと留守電は聞いたよ」

「あ、はい」

「わざわざありがと。メールじゃなくて電話だったのは嬉しかった
よ」

「本当におめでとつじやいます」

「初電話だったでしょ?」

「はい」

「すごく緊張してたね。早口だったよ?」

「う……。すみません」

「そんなに緊張しないで。いつも話しているでしょ?」

「でも電話って一対一なので……」

「まあ、それはそうね」

先輩への祝福を伝えた。

そして、それから他愛のない話をした。

そうしながらも俺は考えていた。

電話という声だけの触れ合い。

近いようでそれはとても長い距離。

触れそうで触れない距離。

表情の見えない触れ合いの距離。

もしかしたらこの距離が一番いいのかもしれない。

知らず知られずの距離 として。

この気持ちを知られない。

自分だけが持ち続ける一方通行の思いを。

心を明かすことなくしまい続けることが出来る距離として……。

あれから5年が経った。

俺は高校を卒業し専門学校を経て今はとある会社のプログラマーとして働いていた。

そんな俺のところにも5月、一通の手紙が届いた。

それは懐かしき先輩からだった。

開けてみると一通の手紙と招待状が入っていた。

今年6月、結婚式を挙げることになりました。

という内容の手紙とその結婚披露宴への招待状が。

それは嬉しい便りであり、同時にあの時の一方通行の気持ちを思い出すものだった。

『あれから5年……』

結局あの後もこの気持ちを伝えることは出来なかった。

いや、出来るはずがなかった。

それは未練となって未だに残っていたのかもしれない。

しかし、今。
その気持ちはもうなくなった。

『お幸せに……先輩』

好きな人が幸福しあわせならそれでいい。

(後書き)

コンセプトは「電話、未練、先輩と後輩、そして最後の決断」
電話のやり取りから思いついたこの電話の距離。

電話を使つての俺と先輩との会話。

節々に照れているところをだそうと、

噛ませて見たり・・・を多く使つたりと少し工夫しました。

最後の決断はもしかしたらただの偽りかもしれませんが。

それでもこの決断は大きい物だと思います。

偽りだろうとつかそれが本当になる日が来ます。

別の人に恋をして、恋愛をして、いつかこの気持ち別の人に向く

日が。

そうなるようにという願いも込めて最後の言葉は

好きな人が幸福しあわせならそれでいい。

にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1096/>

過ぎ去った遠き日～電話の距離～

2010年10月15日22時37分発行